

盗み見た先ほどの報告書に並んでいた、いくつつかの「99」の数字。ケツコンによること無しにはそれ以上の向上が望めない、実質的な練度の上限。

そこに達している艦娘が、遂に大井と北上の二人の他に現れるときがやってきたのだった。

「北上さん、もし……もしなんですけど、私たち以外の艦娘が提督とケツコンすることになったらどうします？」

「うーん、そうねー」

大井の唐突な問いかけに北上は首をかしげる。顎に添えられた左手のその薬指にケツコンの証の指輪がきらめく。

「まあ、提督がしたいって言ったら、あたしたちは反対できないよね」

「そうですね……って、なんで私が反対すること前提の話してるんですか!!」

「あれ、大井っち、反対しないの？」

にやつく北上が大井の前に回り込み、顔をのぞき込む。頬が熱くなるのを感じ、大井は親友から目をそらす。

「そんなこと、どうでもいいじゃ無いですか」

「なにさー 大井っちから聞いてきたじゃん」

提督の執務机に座る北上に手をさしのべて立ち上がらせる。なにせよ、決めるのは提督が行うことであって秘書艦から差し出がましく必要など無い。

「まあ、それはその時になってみないと判らないかな」

「そうですね……」

実のところ練度が最高になったからと言ってすぐにケツコンするわけではないし、そもそも提督は彼女たちに渡すケツコンの証の指輪を用意しているのかだって判らない。

そこまで考えて、大井は先ほど見た練度一覧についての思考を頭から振り払った。

「提督、おかえりー」

執務室の壁際、提督の執務机に勝手に座り雑誌を読んでいた北上が声をあげる。軽巡洋艦たちが提出してきた駆逐艦それぞれの考課表をチェックするのに時間を忘れていた大井は、その声を聴いて始めて提督の帰任に気づいた。

自分の机を我が物顔で占有している北上を一瞥し、何も言わず提督は執務室の中央に置かれた応接セットにどっかりと腰を下ろす。

壁際の時計は既に夜半を指している。特別の夜戦の訓練や、遠征の無いかぎりほとんどの艦娘はもう寝静まっているはずの時間だ。

「ずいぶん遅かったですね、提督」

「今日は違うぞ」

「あら？ 私、何も言ってますんよ？」

どこの鎮守府の提督でも、彼ら彼女らが職務を行っていく上